

「開かれたコミュニティ」が「響きあうまち」

～若者・外部者とキョウソウする豊かな高齢地縁団体に期待する～

森栗 茂一 大阪外国語大学教授、神戸まちづくり研究所副理事長

1 草の根都市再生 in 向島

2003年2月22日、墨田区生涯学習センターは熱気に包まれていた。

日本都市計画家協会 (<http://www.m.mjp.or.jp/jsurp/>) が向島学会 (<http://www.mukojima.net/>) に呼びかけた「草の根都市再生」の討論に、予想をはるかに上回る250人以上、遠くは九州・神戸・大阪から、若者やまちづくり専門家が駆けつけた。さらには、地元の主婦・商店主・ご隠居が、長時間の会議に個人の資格で参加、フロアから厳しい意見・質問をなげかけた。

どうも、今やっている「ビル、ガンガン」の都市再生とは違う、下町の良さを活かした修復型に、もうひとつの都市再生があるのではないかと、現場を見つめている人々が直感したようだ。議論は一気に、路地（を活かしたまちづくり）ネットワークを作ろうという動きになってきた。

しかしながら、こうしたまちづくり議論に出席する住民は、外来の人々の熱気とは裏腹に、極少数である。まちづくりに熱心な一部住民と、新たに空家に入ってきてアートのまちづくりに参画しようという若者と、町会を実際に支え運営する地縁団体（概して高齢化が激しい）とは、必ずしも意思疎通が十分とはいえない。

にもかかわらず、私は、向島の人々には、大きな可能性があるかと確信する。その所以は、向島が「開かれたコミュニティ」だからである。

2 図子とものづくり

向島は近代になって寺島村、吾妻町が急速に町場化したといわれるが、意識の面では、最初から都市であった。網野房子は向島に残る祭礼組織の図子に、京都の条坊の間に町場開発のために引か

れた路地＝図子を重ね合わせ、中世の隅田千軒宿を類推している（網野 2000：134-137）。鋭い指摘である。

しかし、この図子は隅田宿だけの特色ではなかった。荒川区三河島でも、「江戸時代の五人組を端緒とされる通次（ずし）、明治期小字名を冠して互助組織があった。明治11年、祭礼の山車人形の虫干しに道路使用許可を4通次（宮地・仲・蓮田・荒川）で出している（荒川区教育委員会 1999：45）」「15-6軒をブロックに、祭礼組織」「ズシは、農業の助け合い、冠婚葬祭の手伝いグループといわれる（荒川区教育委員会 1999：52）」とある。

しかしズシは単なる「五人組」ではない。それなら閉鎖的になる。異なる人々が寄り集まる川沿いの都市的な場における団結の手段と私は考える。前近代、陸路より川が交通・流通の中心であった。近世では利根川舟運の発展とともにこの傾向はさらに強まった。こうしたなか、中世以来、隅田川沿岸では異なる人々が寄り集まる都市的なコミュニティができた。そこでは、異なる者どおし、神に誓って団結する必要があった。これが図子である。

まだ十分な検討をしていないが、興味深いことに、この図子は河川流域に多いように感じる。だとすれば、隅田川下流域の寺島村には、中世以来の外部者を受け入れる精神と組織が脈々と生きてきたと考えられる。

近代東京の近郊となっても、この地に大工場や町工場が展開したのを、単に湿地が多く都市化が遅れ、地価が安かっただけと解釈するのは一面的だ。多様なものづくりの工場が進出することができたのには、異なる人々をいとも簡単にうけ入れる精神があったからでもある。外部に開かれたコ

コミュニティ、いわば都市的な精神がいきづいているところに、向島の特質がある³¹⁾。

3 向島のまちづくりの変遷

向島のまちづくりは、別表のような展開をしてきた。

85年当初は、安心・安全を合言葉に、一言会<ネットワーク的CBO>と町会（自治会）：消防団<地縁組織>が、協力してすすめてきた。87年頃からは、気分良い地域づくり=ふれあい・環境を中心としたまちづくりが、町会の協力の下、一言会ですすめられてきた。97年頃からは、若者・外国人のartistの定着・滞在・訪問が多くなり、一

別表

| | |
|------------|--|
| 1980年頃 | 関東大震災60周年説⇒ 東京都ハザードマップ危険地区(狭い道路+木造密集)⇒ 東京都防災生活圏モデル地区指定 |
| 1985年 | 一寺(第一寺島小学校区)言問(言問小学校区)を防災のまちにする会 イベント⇒わいわい会 まちづくり瓦版の配布⇒一言会(=6町会+わいわい会) |
| 1987年 | 路地尊第1号(銭湯の湯船に水をはりバケツリレーの訓練) |
| 1988年 | 雨水タンク3t付路地尊(路地を尊ぶとは、路地をなくさないことではなく、路地に象徴されるコミュニティを尊ぶということ) |
| 1989年 | 会古路地10t雨水タンク+汚泥レンガ+古電柱利用 →路地の通り抜け可能 |
| 1990-1991年 | 墨堤の道、百花園前に木のポラード →1991年 日本建築学会文化賞 映画『ふれあう街』 |
| 1996年 | 阪神大震災語り部キャラバンを受け入れる |
| 1996年 | 会社跡に集会所、広場と丘、一言会事務所、20t雨水タンク |
| 1997年 | 雨水利用全国大会 |
| 1998年 | 自治省防災まちづくり大賞ものづくり部門大賞 「何かあっても死なないですむ街」をめざす |
| 2000年 | 向島博覧会 日本民俗学会50周年記念パネル「老熟の力」 |
| 2001年 | 向島博覧会2001 →小さな世界都市大賞 |

方、都市・建築系学生調査訪問や「梅子留学」と称する学生の短期滞在が行われるようになってきた。なかには、空家に住みつくアーティストが現れるようになった。こうしたなかで、

- 1) 向島に住み着いたアートの若者・外国人
- 2) 実験的一時滞在する若者・外国人
- 3) 調査でやってくる一時通過の若者・観光客と、どのように関わるのか。彼らの能力・体力を向島のまちづくりにどのように活かすのかが、重要な課題となろう。

向島は、空家・空地で空洞化する一方で、その開放性ゆえに、多くの外部者を引き込んできた。しかしながら、その外部者が防災・防火の地域活動で中心になっている地縁組織と十分な連携をとれているかというところではない。

まちづくりが成功したかに見える向島でさへ、この20年間、町会や消防団は確実に高齢化し厳しい状況にある。極端に言えば、終戦直後に防共婦人会から突然地域づくりを任された「若妻会」が、一生懸命役割を果たしている間に高齢化した例もある。町会や消防団における志ある若者への受け継ぎは、急務である。

4 魂の受け継ぎ

向島の高齢者(以下、地元の呼称に従い「お兄様方」と表記する)は、極めて元気である。町会のお兄様方は80歳90歳は当たり前、自転車で走り回っている。関東大震災以後のこの町をつくってきて、東京大空襲をくぐって、高度経済成長を支えた世代である。「この町は俺たちが作った」という自負が、防災まちづくりを支えている。消防団の活動は、いつも東京都のトップを走っていると

きく。
しかし、空家・空地や、個別空間に閉じこもる人々がマンションにすみつく³²⁾中で、災害時における人間関係の空洞化が、町を急速に危機に導きつつある。こうしたなか、彼らが半世紀以上にわたって築きあげてきた誇りある町を、どのように

若い世代に託すのか、そのすべがなければ、死ぬに死ねないのが現実である。生涯現役者がいるからと安心してはいけない。それは彼らが戦後50年間かかって作ってきた遺産である。それをどのように受け継ぐのが急務である。

向島は本来、外から居ついた者ばかりの町である。外部を受け入れて今日をつくってきた町である。そろそろ、新しく住み着いた若者に町会・防災活動の役割を与える時期に来ている。

その第一歩としては

① 祭礼に、新入りの若者・外国人を組み入れる仕掛け

② 消防団の訓練に、新入りの若者・外国人を組み入れるきっかけ

③ とともに、まちづくりについて語り合う場をつくる必要がある。①は喜びの非日常であり、②は命に関わる日常活動である。これを踏まえて③となる。

高齢者が豊かに暮らす町とは、福祉措置が山盛の町ではない。一方で、高齢者だけが、地域活動を支え、住民も役人もそれに依存し（安心し）、住民は地域に無関心となり、若者が個別の私的生活にこもる町でもない。

まちづくりにめざめた若者が、「お兄様方」と祭礼や消防団の訓練で語り合い協奏する町でこそ、高齢者はその元気を安心して次代に託せるのである。永遠に元気ではいられない。だから、安心して漸進的引退（延藤 2001：111-114）ができることが大切だ。高齢者の「負い」「重なり」を、地域の若者、外部からの新住民が尊敬を持って受け継げるような仕組みが必要だ。

行政的には、「憲法」「平等」といわず、公開の原則で公正をもって

① 両者を取りむすぶコーディネータをみつけたし、その活動を支援する。そして、祭礼・防災訓練の場では出会う仕組みを間接的につくる。

② コーディネータの人材は、外来の新住民のまちづくり活動の中心となっている中年者がおれば、適任である。向島にはその人材が複数ある。

というようなことがもとめられる。関東大震災以降、この1世紀の東京都の人的財産を無にするか、これを受け継いで修復型都市再生の資源とするかどうかについて、行政が一定の役割を果たしえないとしたら、その存在が問われることになりはしないか。ことは急を要している。

参考文献

- 網野房子 2000 『『中洲の町』向島における老いのあり方』『老熟の力』早稲田大学出版部
- 延藤安弘 2001 『『まち育て』を育む』東京大学出版会
- 東京都荒川区教育委員会 1999 『荒川（旧三河島）の民俗』

※1 大阪外国語大学開発環境講座では、2002年度野外実習として、「向島留学」と称し学生を1ヶ月寝泊りさせ、人々と関わる（お世話になる、少しは働く）なかで、町の暮らしを体験する調査を行った。見ず知らずの学生を1ヶ月近く泊め、世話をやき、心配する地域が、他にどこにあらうか。向島こそ、日本に唯一の開かれたコミュニティだと考えている。

※2 陸の孤島といわれた向島にも、2003年地下鉄半蔵門線が乗り入れる。このため、密集住宅地が、マンションに海食されつつある。類焼を防ぐ意味では悪くはないが、向島の暮らしの保持、路地を活かしたコミュニティ維持にとっては問題点もある。

もりくり しげかず

■1954年、神戸市長田区生まれ。大阪外国語大学教授。神戸まちづくり研究所副理事長。向島学会会員。著書に『幸福の町はありますかー震災神戸と都市民俗』『河原町の歴史と都市民俗学』など。学生との向島留学を記録した「外から見た向島」が、まもなく向島学会にリンクされる。1996年の阪神大震災語り部キャラバンのコーディネータの一人。